
舞踏創造についての新たな理解と創造的でオートポイエティックな舞踏 下意識の「隠れた観察者」から身心システムの摂動まで

葛西 俊治

要約

本論文は、舞踏の本質的創造性を定位するため、心理学的概念として「隠れた観察者」「ミラー・ニューロン」「心身の多重制御システム」「アフォーダンス」を取り入れ、それと同時に精神運動的要素として「精密な動き」「バタフライ効果」「システムの摂動」「拮抗的運動」を取り入れることによって、「身体心理的な探索のための舞踏ダンスメソッド」についての1999年の論文を発展させたものである。自我中心ではなくオートポイエティック(自己組織的)な舞踏についての議論において、「コレオグラフィー(振り付け)」「インプロヴィゼーション(即興)」といったデカルト的で二値的な主体・客体といった動作制御の考え方は、こうした新たな概念によって時代遅れのものとなった。精神科デイケアでのダンスセラピーセッションを含む長年にわたる舞踏についての実践的アプローチは、ユング的な意味での著者自身の個性化原理の過程であるとともに、これらの新たな概念が身心探索的な舞踏において実践的な重要性をもつことを確認し妥当とするものである。

キーワード：舞踏、オートポイエーシス、土方巽、大野一雄、パフォーマンス・アート、創造性、身体心理、ミラーニューロン、体感性、ダンスセラピー、後催眠暗示、隠れた観察者、状態依存記憶、アフォーダンス、カタストロフィー、バタフライ効果、カオス、摂動、拮抗運動、振り付け、即興、一次過程、個性化、デカルト的二分割、野口体操

はじめに

1999年に葛西の舞踏ダンスメソッドの最初のバージョン[1,2,3,4]が書かれそれから10年が経過した。また、1988年から20年になる森田一踏としての舞踏家人生、さらに竹内実花氏との舞踏グループ「偶成天」による10年を経て、筆者の舞踏経験と舞踏に関する考えが深まってきた。

舞踏について理解が展開してきたのは主に舞踏訓練とダンスセラピー・セッションでの体験による。それは一般人あるいは精神科クリニックの患者と直接関わってセッションを

* 舞踏研究および身体心理的实践について Paola Esposito, Ruth Emsley, そして Pawel Szykarczuk の各氏から貴重なコメントを得た。ここに謝意を表する。

進める際に感じられたリアリティと新鮮さによるものである。(精神科では、影響を受けやすい参加者のために、舞踏ダンス・アプローチを修正し安全で安心なセッションとなるようにしている。[5])一方、舞踏公演は、異なる意識状態において内的な衝動に身をさらし身体や外界からの物理的刺激に自らを開放する、挑戦あるいは試練であった。公演に際しては、何が起きたのかをほとんど思い出せないところが何ヶ所かあるのが普通であって、それは公演への全面的な自我没入と状態依存的ないし解離的な記憶によるものである。

筆者と竹内実花氏はそれぞれ 10 年間にわたり精神科でのダンスセラピー・セッションを行い、いずれも日本ダンス・セラピー協会認定ダンスセラピストとなったが、その間、統合失調症のいくつかの心理的側面と舞踏パフォーマンスの間に本質的な関連性があること、特に芸術的創造性と身心の傷つきやすさの点においてそうであることに気がついてきた。すなわち、自我境界が緩い統合失調症的な心性は、異なる意識状態で踊る舞踏の心的な構え(舞踏体)と類比されうること、また、統合失調症患者と舞踏家はともにしばしば自分自身を危険なまでに「侵入者」に開放していることであり、それは通常の意識状態が保護されないまま、非合理的な夢の世界があたかも昼間に実体化するようなことである。S.フロイドはこうした世界を扱うために二つの言葉を用いた。一つは、1)夢の世界または無意識の世界である「一次過程」で、そこでは非現実的な事物やそれらの変容が普通のこととなっている。そして、2)意志決定を行う主体に基づいて「現実原理」が機能している「二次過程」、である。(S.アリエッティは創造性と一次過程の密接な結びつきと、その統合失調症的「古論理」について説明している[6])。

一次過程・二次過程の本質的な違いの一つは、感覚し考え決定するという責任をもつ中心的な主体の有る無しということである。デカルト的な見方とは、二分割された「身体・心」であり、「制御されるもの」対「制御するもの」として説明されるので、フロイドのいう「二次過程」には該当するが、意志決定を行うはずの主体がその主導性を失うのみならず様々な非現実的な事物に浸透される「一次過程」には該当しない。

本論文において、舞踏とは単にダンスなりアートではないだけではなく、むしろ身心に実体化した一次過程を探求する過程と考えられ、その意味で「第三領域」の舞踏として位置づけられる。舞踏を創出した土方の次の言葉は、この状態での舞踏のことを述べていたのかもしれない 「舞踏とは...必死に突っ立った死体である」。

「身」 統合された身心

「身」という言葉は頻繁に用いられるありふれた日本語であり、「統合された身心」を意味する。この言葉は日本の哲学者・市川浩による身心に関する哲学的研究において「身の構造」(1984)[7]という著書の中で詳細に分析されている。日本人にとっては身心が二分割されていない「身」という考えは普通のことであるが、身体と心を対比しあるいは制御するも

のとされるものとして対比するデカルト的な理解は、いわゆる標準的平均的ヨーロッパ語 (S.A.E.; 「言語相対性仮説」を E.Sapir とともに提唱した B.L.Whorf による [8]) を話す人々の間では当然のこととされている。しかし、舞踏の性質を把握しようとする際、日本国外でのワークショップ参加者にとって、こうした二分割的な理解がつまりの元となる。身・心あるいは制御するものされるものに関する議論は、ほとんど「振り付け」か「即興」かという対比で行われるが、これらの言葉は舞踏については全く不十分なものとなる。というのは、「身体化された一次過程」として特殊な意識状態での舞踏では、意志決定を行った対象化する主体そのものが全面的にかすんでいるためである。

ミラーニューロンと体感アートとしての舞踏

1996年、マカクザルの脳研究において「ミラーニューロン」の存在が新たな発見として報告された[9]。実験者がエサを拾い上げるのを見たマカクザルの一部の脳神経細胞が、サルが自ら拾い上げる動作をしたときと同様に反応することが証明されたのである。他者が動作するのを観察しただけで、自らが動作したかのように反応するミラーニューロン発見の衝撃は、神経生理学領域のみならず哲学にも波及した。それは、デカルト的な身心二元論が時代遅れであると判明する可能性とともに、人は他者をどのように認識するのかという現象学的疑問の一つが、実は他者とはミラーニューロンの活動を通じて脳においてすでに所与であるとしたら、単なる思弁的な想像に過ぎないかもしれないためである。もちろん、ミラーニューロンといった生理学的発見を「意識の哲学」にそのまま応用することが妥当か否かという議論[10]があるにしても、ダンスセラピーや自閉症児の教育における「ミラーリング訓練」(相手の動きを真似る)が、この発見によって肯定的な方向で全面的に再構成されてきている。

パフォーマンス・アートは通常、視覚的芸術と見なされている。しかし、他者の身体動作によって作り出された視覚刺激が観客の身体的反応を活性化するのならば(ミラーニューロンにより少なくとも脳レベルではそうなっている)、パフォーマンス・アートとは「体感的アート」あるいは身体感覚のためのアートとして認識され正しくそのように定義される必要がある。本論文で述べる「第三領域の舞踏」あるいは身体心理的探求のための舞踏とは、こうした新たな体感的アートの最初のものとなるだろう。事実、筆者らによる舞踏公演はしばしば特殊な身心状態をとり、「身写し」あるいは身心の「反響(エコーイング)」を用いることによって、観客の下意識状態を深めることを目的とする。それにより、催眠下においたように観客をしばしば動けなくさえしてしまう。

*催眠誘導法の多くが言語的手続きと筋肉硬直を伴う様々なタイプの身体的手続きとを用いている(Milton Ericksonのアプローチを除く)。また、集団催眠においては、他

者が催眠状態に入るのを見ることによって、見ている人たちの催眠感受性が亢進する。身体と心、並びに他者とのこうした相互関係は「身写し」と呼びうるが、それはミラーニューロンによる現象と類似しているだろう。なお、催眠あるいは無意識的影響についてのこうした理解は、腕の脱力の困難さと、それが社会的に条件づけられた緊張反応と関係しているという、著者による研究に基づくものである[11]。(ボディラーニング・セラピーは、こうした社会的に条件付けられたこうした身体の解放、あるいは身体の脱社会化を含んでいる)。

本論文の目的は三つある。1) 身心についての二元論的理解を乗り越えることにより、統合的な身心探索の過程という、舞踏のもう一つの側面を示すこと。2) 舞踏の創造性の本質的構造を理解するために、舞踏的態度(第三種の舞踏としての「舞踏体」)を、たとえばミラーニューロン、アフォーダンス、システムの摂動という最近の理論的展開、及び他のいくつかの心理運動的要素と結びつけ、それらとの関係を示すこと。3) 筆者の舞踏経験を、マスローの意味での自己実現過程、あるいはユング的な意味での個性化過程として理解すること、である。

以下のいくつかのトピックは最近の論文「身体的心理療法の原理とボディラーニング・セラピーの視点」(2006)[12]にてすでにふれているが、本論文に含まれているいくつかの考え方を取り入れていないため、本論文が1999年の舞踏論文の理論的継承となる。

・「振り付け」という言葉の不十分さ

大野一雄の舞踏は即興的であり、一方、土方巽のはすべて振り付けである。これは、人々が物事を単純化した、しかし誤りに満ちた仕方理解する傾向があることを示す明確な例である。大野は公演の前に小さなメモを手握りしめ繰り返してチェックしていた。それは振り付けのノートだったのか、あるいは舞踏のイメージのメモだったのか。大野は息子で舞踏家の慶人との共演に際して、稽古中に鋭く言い争っていた。大野の「即興」とは、それほどまでに事前の取り決めが必要だったのか。土方は公演のスタイルを少なくとも三度変更しており、一つは「ハプニング」と呼ばれまったく振り付けなどのないものから、土方の夢を舞台上で喜んで具現化しようとする芦川洋子らの有能な弟子達に対する完全振り付けである。

対にした比較は理解しやすいが、振り付けか即興のどちらかかといった議論がまるで決定的であるかのような無用な誤解を招くという危険を冒すことにもなる。舞踏とは何か、舞踏家はどのように踊っているのかを説明する際、振り付け・即興という言葉を用いた実りのない議論が繰り返されてきたので、ある時点で著者はそれ以外の他の用語や概念を見いださねばならないという結論に至った。意識的な自己である「私」というものが、舞踏に

おいて次ぎに何が起こるかをいつも判断したり制御したりしているのではないことを我々はすでに知っている。したがって、意識的な自己というものが振り付けをしてそのように身体に指令を与えたりとか、意識的な自己というものが即興的にしようとして、そのように即興的に決めたので事前に決めていた動きに変更を加えたりとか、そうしたことは古風な神話に過ぎない。仮に即興ということが、下意識的な衝動とか内界外界からのその他の突発的な影響に関わるものだとしても、振り付けされたパターンから、あらかじめ決めてはいなかったパターンへと意図的に切り替えるという行為そのものが、相当に自我中心であるし、意志決定する主体である「私」にまだ価値をおいている。振り付け・即興という言葉はもちろん、ダンス・パフォーマンスについて一般的に述べる際にはそれ自体として特に誤っているわけではない。しかし、この二つの言葉はデカルト的な身心二元論の考えを暗黙のうちに意味しているために、舞踏についての議論に際してはそれを回避する必要がある。さもなければ、土方が1950年代に創始してからすでに半世紀以上も経過しているのにも関わらず、舞踏がなぜ依然として「前衛的」であり因習(偶像)打破的であるのかを探究するのが困難なのである。

． 暗黒舞踏の世界へ

土方巽が「Ankoku Butoh 暗黒舞踏」(暗く黒いダンス)を1950年代の日本で創始した。当時の芸術家や文壇が彼の常軌を逸したダンスを「an-koku(暗く黒い)」ダンスと呼び、土方はその名前を取り入れた。(日本語では舞踏と舞踊という二つの言葉があり、前者は「舞う(はばたく)」と「踏(ふむ)」から成り、後者は「舞う(はばたく)」と「踊(おどる)」から成る。)1959年の記念碑的な舞踏作品「禁色」はホモセクシャル的テーマをもち、全くの闇の中、ニワトリが舞台上で絞め殺された…。観客にとっては衝撃的な作品だった。この公演のすぐ後、土方は日本モダンダンス協会から放逐され、土方の名前と舞踏は1986年に土方が亡くなる頃まで、日本芸術年鑑の中で公的に触れられることはなかった。なお、当時、土方と共演した大野慶人は後に「ニワトリは殺さなかったし、生きていて卵を産んだ」と語った。1980年、山海塾の若い舞踏手が公演のためフランスに飛び、ヨーロッパの観客に高い評価を受けた。それ以降、山海塾は世界的に最も優れて舞踏集団として活動を続けている。彼らの成功の後、多くの日本人舞踏家が踊りでは生活が成り立たない日本を去り、ヨーロッパやアメリカに渡り様々な国で公演活動と舞踏の指導とを開始した。暗黒舞踏は拡散と国際化の過程で次第に「Butoh」と呼ばれるようになった。

1988年、土方がガンで亡くなってから二年後、山海塾の蝉丸が北海道の海沿いの街である小樽で一週間にわたる集中的舞踏ワークショップを開き、そこに著者は参加した。小樽にはかつての「北方舞踏派」があり、その解散後に小島が「アルタイ」という舞踏一座を続けていた。著者は、山海塾舞踏手の身体的感性そして身心に起こっていることを了解する能

力とに深く印象づけられていた。その後、アルタイに所属し森田一踏として舞踏活動を始めた。

ある晩、メンバーはかつては映画館だったという万象館の古く暗いスタジオで稽古をしていた。私は内面から何か衝動的なものがやってくるのを待っていたが、急に私の右腕が捻れ始めた。途方に暮れていると、その捻れの動きは全身を圧倒し始めた。私は右腕が肩や肘の関節からねじ切れるかのように感じた。私の右腕は若い頃外科手術を受けたことがあり、その腕が苦悶していた。このことが私の舞踏人生の本当の出発点となった。

この 20 年間、私は稽古や踊りに際して、身体的に新しく新鮮なことや、気持ちの奥深くあるいは天的で純粋な何かを見いだして驚愕してきている。そうした体験の多くははっきりとは思い起こせず、記憶の痕跡や身体的記憶あるいは感覚的痕跡としてのみ残っている。こうした神秘的な事柄をもう少し理解したいものだと願い、私は心理学者として稽古や公演を通じて探索を続けてきている。

心理学の知識は飛び石のように機能するので、自分の身心をそこで支えて下意識の世界の海をのぞき込む。あるいは、それは、圧倒的な情動や他の侵入者によって震撼させられた際に、身心を日常の世界へと結びつける紐帯となる。本論文における心理学的説明は単に学術的に得られてきただけでなく、探索的な舞踏という身体化した一次過程の中で、心理的な混乱や崩壊に陥らずに生き延びるために必要でありかつ効果的であることを経験的に確かめてきたものである。

．異なる意識状態

チャールズ・タート(1969)[13]は、E.ヒルガードとの下で催眠研究を行った後、人間には質の異なる意識状態があることを議論し、それを「異なる意識状態」(定訳は「変性意識状態」)と呼んだ。いくつかの意識状態は身心の生理学的状態と直接結びついているもので、例えば、睡眠、睡眠剥奪、断食、酸素欠乏、窒素酔い、アルコール、向精神薬、あるいは様々なダンスや宗教的訓練、あるいは感覚遮断、催眠など、である。

山海塾舞踏手、岩下徹は琵琶湖畔の精神科病院にて 20 年間、ダンスセラピーのセッションを行っていることで知られている(2007 年まで日本ダンス・セラピー協会副会長)。彼のセッションにおいて陰性症状の統合失調症患者が動き始めたことが報告されている。統合失調症患者の中からそうした反応を引き出すためにどのような要素が必要なのかは明確ではないが、特殊な心理状態にある人々とコミュニケーションするためには、舞踏における心理的なあり方、いわゆる「舞踏体」といったようなものが、異なる別の心的状態として関係

しているように思われる。

著者自身の精神科でのダンスセラピーのセッションや他のプライベートのセッションにおいて、自分では予定していないことを行っていたことに気がついた。不思議に思い内省してみたところ、特に注意を向けていなかった参加者の微細な姿勢や動きの変化、あるいは他の非言語的な刺激によって影響されていたに違いないと結論づけることとなった。それはあたかも、ミラーニューロンの発火により無意識的な暗示として与えられたかのようであった。舞踏に関わる活動に際して、著者自身の自我境界が薄いのか浸透しやすいのか、それは統合失調症患者の多くに類似しているのかもしれない。彼らの自我境界は、主観的に感じられている「外側」から来る何者かによって侵入されやすく、それは自我境界の壁だけではなくその「底」や「天井」を通じて何者かに来られているといえる。もちろん、そうした比喩表現が役に立てばであるが。昼間の集合的無意識ないし一次過程ということは、異なる意識状態の中でも確かに凄まじい状態であり、そこでは対象化という主観的なならざる機能が失われ、感覚される世界は不気味なものによって満たされてしまう。

*統合失調症は意識の病理的状态であり、おおむね脳機能の異常として理解され、そこでは自己の存在が脅かされ安定的に維持するのが困難となる。G.ベイトソン[14]により、することとしないことがどちらも許されないダブルバインド状況として行動の無効が見いだされたように、その症状は部分的には不適切な対抗やその失策によって構成されている可能性がある。

心理学的理解とは別に、現象学的社会学者アルフレッド・シュッツは多元的現実論を提唱しており[15]、人はある現実から「限定された意味の領域」と呼ぶ他の現実へと跳躍しつつ複数の現実を生きるとされる。彼の説く現実には社会的役割ないし心的状態から構成されているので、多重人格障害の患者はこの理論の好例となりそうであるが一つだけ問題がある。それは、多重人格者の実際的な問題というのは、以前の経験と記憶が、交代した次の人格に移行されないために記憶の欠損に苦しむことにある。シュッツが説くような多重の社会的現実の間を跳びながら生活するならば、多重人格であることは特に問題ではなくむしろ普通の状況であるが、多重人格に伴う記憶欠損が主要な障害となるわけである。通常、身心の特定の状況のもとで何らかの記憶群が得られ、その記憶はそのときの生理学的、社会的その他の状況的な文脈からなる状態と強く結びついているため、記憶の状態依存性あるいは記憶の解離状態が発生する。ある記憶が非常に異なる身心状態でのものであると、そうした記憶の想起ができなくなってしまう。つまり、異なる意識状態ということは、そのまま、自然健忘や記憶の解離を引き起こすものとなる。何らかの心的外傷経験において、そうした事柄は通常の心的状態では経験されないほどに非日常的であることから、何らかの異なる意識状態が生み出されその記憶が解離される。例えば、ある舞踏訓練にお

いて、極度に情動的な震えや痙攣は恐怖や他の強烈な感情を誘発することがあり、それにより長い間忘れられていた記憶がそれに伴ってふいに出てくることがある。それは、身体化された「心的考古学」の探索への重大な出発点となりうる。

*探索的な舞踏は心理療法を意図するものではないが、舞踏に基づくボディラーニング・セラピーは身体指向的心理療法であり、トラウマへの対処におけるように必要な介入を与える。心理学的外傷は言葉によるセラピーを超えた関わりを必要とする。それはその症状がすでに身体化され、脳の三つのレベルにおける介入が効果的であることが知られているように[16]、認知的情動的身体的要因が複雑に絡み合っているためである。ボディラーニング・セラピーは、舞踏を一つ的手段とし、痙攣などに付随するパニック行動を自律性解放および究極的なアート形式とみなすことによって、そうした反応の安全な容れ物として舞踏ということを取り入れている。

・ 下意識の隠れた観察者

アーネスト・ヒルガードは、催眠および催眠感受性尺度について高名なアメリカ人研究者であるが、深い催眠に入る被験者を用いて一連の心理学的実験を行った(1977)[17]。被験者は氷入りの水の容器に左手を浸すように教示を受け、冷たさから来る痛みを1から10の順序尺度、10は耐えられない痛みとして口頭で報告するように指示された。すると、痛みの数値はすぐに上昇し、氷入りの水の中に左手を入れておけないほどの痛みである数値10になった。ところで、この実験を行う前に被験者は深い催眠状態に誘導され、(右手による)「自動書記」を行うよう後催眠暗示を与えられていた。すなわち、「実験の間、自分自身で気がつくことなく、右手は左手の痛みの度合いを紙に書き続ける」。その後で、被験者はこの後催眠暗示を忘れるように指示された。すると、右手で書かれた痛みの度合いは急には上がらず、最大の痛みにもならなかったことをヒルガードは見いだした。つまり、一人の被験者から痛みの度合いのついて異なる二つの報告を同時に受け取ったことになる。この結果を齟齬なく理解するためにヒルガードが提起したのが「隠れた観察者」と呼ぶ仮説であった。意識的な自己から独立した下意識層にもう一つ別の監視する主体が存在するというもので、一人の人間の中に複数の観察あるいは報告システムが存在しうることを科学的に確認した最初の研究といえる。(多重人格障害は「隠れた観察者」仮説とは直接には関係しない。というのは、多重人格では、制御主体が他の主体に切り替わるが、過去の経験は次の主体には移行せず、常に一つの制御主体が存在するためである。)

この研究は、個々人の責任が曖昧になる事態を招くことにより、社会全体を揺り動かすような社会的に画期的な発見でもあったはずだが、実際の衝撃は限定的であり、じきに膨大な他の心理学研究の下に埋もれていった。注目されなかった理由の一つは、個人や社会

によってすでに受け入れられている事柄と調和しない場合、事実の方が否定されるという我々の認知的傾向にある。また、もう一つの理由は、催眠感受性の高い被験者の数は極めて限られているため、彼の実験を大規模に繰り返すことが困難だったことによる。

科学的な意味では、「隠れた観察者」仮説は証明されてもおらずまた完全に否定されてもいない。「隠れた観察者」についてのヒルガードの別の実験は、これと類似の現象である「ノドから出かかっていること」を理解するための手がかりを与えている。何かを思い出そうとするとき、我々にできることは、思い出せないでいること(あるいはそれに関連する状況とか上位概念など)を意識的に思い出そうとすることである。すると、すぐに「ああ、そういえば」という体験とともに、思い出せたことに気がつく。すなわち、下意識のどこかに制御センターがあり、それが記憶検索の役割を担い、検索した結果を意識へと転送していることになる。しかし「ノドから出かかっている」現象では、下意識の探索システムからは何も上がってこないのもどかしい状態におかれる。このことから、記憶探索を実行する主体が下意識層に存在すると仮定するのは自然なこととなる。

別の実験において、ヒルガードは被験者に何か物語を口頭で語るように依頼したが、被験者の右手は後催眠暗示により、語っている本人に気づかれぬままその物語を書き続けるように指示されていた。書かれた物語は、まるで自動書記の書き手が基礎的なシナリオライターであるかのように、口頭で語られた物語の筋または概略を含んでいたという。この実験はそれほど厳密に制御されておらずまた結果の分析もそれほど満足できるものではないが、結果が示唆することは冷たい水に手を入れた痛みの実験と同様であり「隠れた観察者」仮説の可能性を示すものである。これにより、身心二元論あるいは制御する側とされる側という二分思考は、旧来の支配的地位を失ったと結論づけるべきであろう。

・ アフォーダンスと動きの正確さ

ダンスムーブメントにおける身体制御の精度は少なくとも 10 ミリ程度であり、実際的には高々5 ミリ程度と考えられるが、手作業による金属加工の専門家の中には数百分の数ミリなど驚くべき精度が知られている。(舞踏訓練において「(比喩的に)髪の毛を分割する(ほどに小事にこだわる)」例は"Hijikata and Ohno" 2006 [18]に述べられている)。動きの精度を高める際には、意識的な「私」が一連の動きをあらかじめ「振り付ける」ということでは不十分である。というのは、予定しているパターンに背く要素が身体の中にも外界にも数多く存在しているからである。このことから、精密な動きはその時々起きてくる事柄を捉えるという感受性、そして身体を精密に制御する能力とに依拠するものとなる。単純な歩行プログラムで機械的に動くロボットは、道路状況の情報、すなわち、ぬかるんでいる、石ころだらけ、草深いなどを用いなければすぐに倒れてしまうだろう。なお、多くの日本人舞踏家が用いている野口体操(野口三千三による身体訓練)では、筋肉とは実働器官では

なくむしろ身体や外界からの情報を受け取るための感覚器官として用いるべきという教えがある。

ジェローム・ギブソンは 1977 年 [19] に生態的心理学の領域において「アフォーダンス」という術語を生み出し、近年、動作に関連するこの概念の重要性が高く評価されている。アフォーダンスとは例えば次のようなことである。ある形・サイズ・重さの茶碗が目の前にあり、それを手に取ろうとするとき、それをつかもうとする実際の動作は、取っ手の場所、形、サイズ、角度、手触りなどのいくつかの物理的屬性によって導かれる。つまり、ある物体の物理的屬性によって行動が「与えられる」、あるいは、つかむ動作がどうあるべきかが指令される。また、茶碗に近寄りつつ、例えば、指にはどのくらいの力を入れれば茶碗を持ち上げられるかなど人は暗黙の内に予期する。類似した経験に基づいてこうした予期が行われるが、そうした予期に反して茶碗はもっと重かったり滑りやすかったりするかもしれない。茶碗を持ち上げるために暗黙のうちに作られた当初の計画は、それが非現実的であり失策だったと分かるのは、実際に茶碗に触れた途端である。世界はそのように物言わぬ不確定性に満ちている。

アフォーダンスの簡潔な定義は「刺激と反応の両立性」であり、人間による計画ないし意図と物理的世界との相互作用が本質的であるという意味である。自我中心的なデカルト的な見方は、アフォーダンスの概念の中では居場所がない。行為が失策となることを避けるために、心は必要な情報を得るために心をもたない物体に尋ね続け、物体からの応答に伝えていかねばならないからである。探索的に触れる動作が小さければ小さいほど、物体とより効果的に関わることができる。このことは、野口体操が 1960-1970 年頃、舞踏訓練に取り入れられてきた理由を示している。すなわち、精密さへの訓練は自らの身心を探り制御する際に、また物理的世界とより柔軟かつ効果的に関わるための身心能力を高める際に本質的だからである。

野口体操においては、しかし、身体動作の精密さを高めることは不要な筋緊張によって身体を固定することを意味していない。筋緊張の関しては、物体(身体部位それ自身を含めて)と最も経済的に関わる方法を見いだす必要性を重視しているからである。野口は、人間の身体はコアセルベートかあるいは水に満たされた革袋であって、そこに筋肉や骨や内臓が浮かんでいると捉えているので、野口体操における精密さへの訓練とは、身体部位と外界にある物体と間に、受動的な動きの可能性を見いだしつつ、ダイナミックで柔軟な調整を行っていく過程となる。例えば、野口の最初の著書である「原初生命体としての人間」1972(未訳)などに述べられている彼の考えは、本論文において説明する現代的な概念によりさらに重要性を増していることを指摘しておきたい。

手の込んだ豪華な衣装を身にまとうとき、衣装の内側と肌とがときおり擦れ合うことにより、身体はその衣装の中で踊ることになる。こうした微細な動きは他者に見て取られることのないものであるが、皮膚感覚を通じた身体感覚あるいは体性感覚における精密な動

きの訓練でもある。(受け身的に与えられるこの種の世界は、統合失調症の心的風景に関わることがある。)また、身体を支えるのに必要最小限の筋緊張によって、痛々しいほどに緩慢に歩行するとき、それは、骨や筋肉や内臓のダイナミックで安定的な配列を探りながら、そうした身体部位の固有受容感覚(体内感覚)における精密動作の訓練となる。極限的な状況において身心の限界に近づいていくとき、動作に伴う身体的痛みはしばしば、動きの精度についての良い導き手となる。

精密な動きの追求に際して、あらかじめ警戒しなければならないことがある。第一に、精密さへの訓練とは、意識的自己が身体を完全に制御するということを意味してはならず、それでは古い身心二元論へと再び陥ることになる。それよりもむしろ、より精密な受動的動きが実現されることを「願う」という態度が必要であろう。関連する筋肉や靭帯などを直接制御しようという試みは、アレキサンダー・テクニクで述べられている「エンド・ゲイニング(結果の先取り)」という落とし穴に陥る危険を冒す可能性がある。第二に、精密さへの訓練は、ある動きについて以前には気がつかないでいた微細なズレを感じ取る能力をも高めることから、結果的に、より影響されやすい身心状況を引き出す傾向がある。このため、精密さへの訓練は、意図していたことは正反対に、遂行中の動作のみならず身心状態についても、逆説的に、予測困難で創造的な破綻を起こすことにもなる。

・ バタフライ効果と摂動

「髪の毛を裂く」(小事にこだわる)ような精密さへの訓練が必要である理由は二つある。第一に、それが自らの身心の限界を極める唯一の方法であり、それによって身体心理的探索のための舞踏が実質的に深まるからである。(痛みを伴う舞踏訓練は、それが有害でない限りにおいて、身心の限界を認識するために必要となるだろう)。著者は、些末とも言える身体的な違いに関心をもち、かつそのことを感じ取れる人は極めて限られた人数であること、その中でも、例えば心臓の鼓動に合わせて上体が脈動するための正しい姿勢に到達する人も極めて限られていることに気がついてきた。第二に、動きの創造的な展開というのは小さな違いから発生することである。自身の舞踏経験とパフォーマンスにおいて、それが心理的なことでも外界のことでも、見た目には些細な違いがしばしば新たな動きや身体心理的な気づきをもたらし、それによりまったく新しいパフォーマンスや新たな身心状態が作り出されることを筆者は味わってきた。

小さな違いが結果的に大規模な変化を生み出すという現象は近年バタフライ効果としてよく知られるようになった。これは、気候予測の理論的研究において、ほんのわずかの気流の摂動、例えばチョウの羽ばたきによって起こされたような変化が、将来的に地球規模の天候の変化を決定づけるという考えによるものである。これはカオス理論の基本的な理解であり、ダイナミック・システムはその初期状態によっては、長期的には大規模な変

移を招き入れてしまう。しかし、長期の蓄積的な効果がなくても、わずかな違いや摂動によってシステムの構造に不連続で大きな変化が起きることがある。その単純な例としては、水が液体から気体になる際、摂氏 99.99 度から 100.00 度になるというわずかな温度差によって水の状態が劇的に変化する。

例えば、球体上を西向きの風がジェット気流のように同緯度で流れていることを考えてみる。そこに、例えば北極方向へのわずかな気流の摂動が起きると、同緯度を同心円的に流れていた気流は互いにつながり、結果的に南極側から北極側に向かう螺旋状の気流へと変移する。無視される程度のわずかな摂動が同緯度を同心円的に流れていた安定的な気流の構造を巨大な上昇的な螺旋気流へと変えたことになる。ここで、摂動が上向きではなく、下の南極側に向かっていけば、螺旋状の風は結果的に逆になり下の南極側へと向かうことになる。わずかな摂動により一度その方向が決定されると、結果としておきる大規模な過程はすぐに逆転させることはできない。

トポロジー研究者のルネ・トムは、上に述べた例のような様々な数学的多様体上で起きる、ベクトル場のパターンの不連続な移行を理論化してカタストロフィー理論[20]を唱え、折り目カタストロフィー、カスプ・カタストロフィなど七つの基本的な不連続変移を提示した。この理論は舞踏パフォーマンスにおける突然の動きの変化を比喩的に理解するのに役立つだろう。たとえば、床の小さなササクレあるいはトゲのある言葉の記憶は、身体のバランスの取り方にわずかに影響し、しかし結果的に歩行の向きや歩き方を偏らせ、予定していた一連の動きをすべて無効にすることがある。小さな攪乱要因である摂動が、引き続く一連の行動にとって分水嶺または分け目となる尾根として働く。こうしたことが、予想されない仕方で舞踏の創造を可能とするのである。

・ 拮抗動作と非一次元的解消

デカルト的の身心二元論のような二値的な考え方は身体心理的探索に向けた第三種の舞踏を把握するには単純過ぎることを示してきた。しかし、身心に関わる現象の多くは、伸筋対屈筋、感情喚起対社会的抑制、イド対超自我の葛藤などのように、二値的な見方で説明される傾向にある。そうした拮抗的な二つな力、それが物理的、心的あるいは象徴的なものであれ、それらが衝突し互いにその強度において釣り合うとき、その衝突は一時的に停止しているように見える。比喩的には熱を発生しながらであるが。この状態ではそこに何らかの摂動の起きる余地があるから、例えば拮抗する二つの筋肉群は動きのぶつかり合っている領域で痙攣を発生させる。身体心理的エクササイズのプロセスでは、引きつりや痙攣または発作などは通常、突然起きるジャーク(ピクンといった動き)により解消することがある。たとえば、下顎の痙攣的な動きは、その結果として、突然、顔の歪み、空気の吐き出し、あるいは身体の他の部位のピクンといった動きをもたらし、顎の痙攣は一時的に停

止する。このような状況打破は、(拮抗筋の)動きの第一の方向でも次の方向でもなく、それとは関連のない部位で起きる。拮抗を解消するような第三の領域がどこかにあるのかは、二つの競合する力が実際に衝突するという経験前には予見されない。このような拮抗的な動きが、ライヒの重要な概念である「筋肉のヨロイ」に関わる身体部位に起きると、そうした経験の過程そのものが身体指向的な深層心理療法の出発点となり得る。

自らの禅体験に基づいて日本版の哲学を開拓した著名な哲学者・西田幾多郎(1880-1945)は、最初の著作「善の研究」(1911)に書かれたたとえば「純粹体験」、また、晩年における有名な言葉「絶対矛盾の自己同一」など、独特な考え方を展開して自らの哲学の領域を打ち立てた。特に後者の「絶対的に矛盾している要素はそれ自体としてすでに自ら同一の状態にある」といった考えは、本質的な矛盾をダイナミックに超えるための方法として、40年以上も前に筆者は驚嘆させられていた。

拮抗的な動きを練習していたある日、西田幾多郎の古い謎がふいにその秘密の一端を現した。拮抗的な力が葛藤状態にあるということは、それらがそれぞれを位置させる共通の次元を構成しているからである。つまり、拮抗するベクトルあるいは二つの力の厳密な衝突とは、常に単一次元上のことでなければならない。さらに、そこにもう一つ他の次元を的確に見いだすならば、矛盾する二つの要素は互いに重なり合い、その次元を中心点で理念的に折りたためば両者は同一のものとなる。それは因子分析や多次元尺度構成法におけるのと同じだと…。拮抗的葛藤の単一次元性についての身体的直接体験と比べて、こうした言葉がなんと冗長なことか。

この感覚を得るためには、正反対の方向で正確に衝突することを身体上において実現せねばならない。上記の実感から筆者は過去の一つの経験の思い起こすことになった。それは、野口体操の「脱力した身体を地面に対して上向きにブラ上げる」練習をしていた際、一度だけ、地面に対して正確に垂直に立てた時のことであり、地球の中心と直接結びついたという深い感覚を得たことであった。そのどちらの体験も、単一次元性についての現象として、身心の強い実感を伴って訪れてきたものだった。

ここまでの議論は心理学的概念から数学的モデルまでと広範囲にわたり、それらすべてを統合するのは容易ではないように見える。しかし、ここで「自己創造」あるいは「自己組織化」を意味する「オートポイエーシス」という言葉、マトゥナーラとヴァレツァ(1980)により提唱された生命体に関する最近の概念を採用するならば、本論文の主要な論点は類比的には網羅されるだろう。すなわち、舞踏の創造とは意図的に身体に指示を出すという過程ではなく、アフォーダンスを通じて新たな身体的行為を自己創造する、オートポイエティックな過程であると。したがって、舞踏の身体心理的探索とは可能な限り意図的自己を解放することによって、このオートポイエティックな過程を実現する試みとなる。(実際

的には、オートポイエティックな過程と意図的制御とは必ずしも排他的ではなく、それらの強度を変えながら共存する。)

・ 舞踏を通じた自己実現

アフオーダンス、摂動、そして拮抗的運動に関して舞踏を通じて深められた身体的感覚のもとでは、見失われていた様々な感情が浮かび上がり感じられてくる。個人的なものあれば、集合的無意識あるいは深い「考古学的な心」からやってくるものもある。こうした感情の高まりと消失を身体的に探ることが、スピリチュアルな旅路としての第三種の舞踏の役割である。

筆者の舞踏人生において、舞踏家であり、心理学者であり、ダンスセラピストであるというあり方に匹敵する者はいないように思われる。舞踏家の多くはダンスないしアートの一形式としての舞踏に関心を持ち、心理学や心理療法の側面にはそれほど関心をもたない。ダンスセラピストあるいは身体指向的サイコセラピストを除いて、心理学者のほとんどは舞踏に関心がない。筆者は身体的および心理的に自己自身を実現すべく活動し、正気と狂気の平和的な共存に向けてユング的な意味での個性化過程を経てきた。それと同時に、そうした多値的な活動とそれに伴うエネルギー分散のために、マスローの欲求体系では人間にとって第三の欲求である、社会への安定した所属を、結果的にすべての領域において犠牲にしてきた。

この十年間、筆者による以前の舞踏論文は様々な国で読まれ、舞踏スタジオを訪ねてくる者は、伝統的な舞踏に限定されず舞踏のあらゆる側面に関心を示す傾向にある。その大きな理由は、彼らは自らの文化、社会、そして身体的背景の中で、自身の舞踏を創造しようとしているためである。本論文の中で筆者が説明してきたことは、他の多くの舞踏家が扱いそうなテーマではないが、舞踏の探求をライフワークとして22年間踊ってきた舞踏家として、これらのテーマは真正の舞踏のための源泉であること、それは筆者による最初の舞踏論文がそうだったように、身体心理的な探索のための舞踏とともに公演およびアートとしての舞踏においてもそうした源となっている。

筆者は、真正の舞踏の核心として維持すべき事柄が二点あると信じている。一つは舞踏の本質的創造性であり、もう一つが本質的な真剣さである。中国の高僧、臨済による「逢仏殺仏」とは、徹底した創造と究極的な真剣さのためのことであろう。なお、仏陀自身はるか以前に弟子に対して「一つ道を二人して歩くなかれ、一人、犀のように進め」と語っている。仏教は日本人の精神構造に深く染み入っているけれども、舞踏はその始まりにおいて仏教とは全く無関係である。しかし、いずれも一つの態度を必要としているように思える。それは、孤独さ、真剣さ、そして探索することである。

土方巽は、一連の「東北歌舞伎計画 4」(1985)の後、死去の一年前であるが、暗黒舞踏

という言葉に矛盾するような明るくて天上的な世界をイメージしていたと言われている。身心の探索がしばしば矛盾へと至り、創造的な突破を必要とすることから、本論文に書かれた最も真剣な精密歩行が滑稽なつまずきへと終わったとしたら、土方の終わりのない夢、舞踏にとって、最も独創的で理想的な捧げ物となるかもしれない。

文 献

- 1.Toshiharu Kasai "A Butoh Dance Method for Psychosomatic Exploration" *Memoirs of Hokkaido Institute of Technology*, No.27, 309-316, 1999
- 2.Toshiharu Kasai "A Note on Butoh Body" *Memoirs of Hokkaido Institute of Technology*, No.28, 353-360, 2000
- 3.Toshiharu Kasai and Kate Parsons "Perception in Butoh Dance" *Memoirs of Hokkaido Institute of Technology*, No.31, 257-264, 2003
- 4.Toshiharu Kasai "Arm-Standing Exercise for Psychosomatic Training" *Bulletin of the Faculty of Humanities*, No.77, 77-81, Sapporo Gakuin University 2005
- 5.Toshiharu Kasai "Sense of safety and security for creative works nurtured by meditative Butoh dance movements" 10th ECArTE conference (European Consortium for Arts Therapies Education in London), 2009
6. Silvano Arieti "Creativity: Magical Synthesis" New York, Basic Books 1976
7. Hiroshi Ichikawa "Structure of MI (MI no Kohzo)" (Japanese) Seidosha, 1984
8. Benjamin L. Whorf, "Language, Thought and Reality" Cambridge, MA: MIT Press 1956
- 9.Giacomo Rizzolatti et al. "Premotor cortex and the recognition of motor actions" *Cognitive Brain Research* 3, 131-141, 1996
- 10.Daniel D. Hutto "Beyond Physicalism" John Benjamins Publishing Company 2000
- 11 Toshiharu Kasai "Reconfirmation of the difficulty of arm relaxation task" (Japanese), *Japanese Journal of Hypnosis*, Vol.41, No.1-2, 34-40, 1996b
- 12.Toshiharu Kasai "The Principle of Somatic Psychotherapy and the Viewpoint of Body-Learning Therapy" (Japanese) *Bulletin of the Faculty of Humanities*, No.80, 85-141, Sapporo Gakuin University 2006
- 13.Charles Tart "Altered states of consciousness" New York: Wiley 1969
- 14.Gregory Bateson "Steps to an Ecology of Mind: Collected Essays in Anthropology, Psychiatry, Evolution, and Epistemology" University Of Chicago Press 1972
- 15.Alfred Schutz "Collected Papers I: The Problem of Social Reality" Ed. Maurice Natanson, The Hague: Martinus Nijhoff 1962
- 16.Claudia Herbert "Healing from Complex Trauma: An Integrative 3-Systems' Approach" In "About a body" Eds. J. Corrigan, H. Payne, H. Wilkinson, Routledge 2006
- 17.Ernest R. Hilgard "Divided Consciousness - Multiple Controls in Human Thought and Action" Wiley Interscience 1977
- 18.Sondra Fraleigh and Tamah Nakamura "Hijikata Tatsumi and Ohno Kazuo" Routledge Performance Practitioners 2006

舞踏創造についての新たな理解と創造的でオートポイエティックな舞踏 (葛西俊治)
New understandings of Butoh creation and creative autopoietic Butoh

19. Jerome J. Gibson “The theory of affordances” In “Perceiving, Acting and Knowing” Eds. R. Shaw and J. Bransford, Hillsdale, NJ: Erlbaum 1977
20. Tim Poston and Ian Stewart “Catastrophe: Theory and Its Application” Dover Publications 1978
21. Humberto R. Maturana, and Francisco J. Varela “Autopoiesis and Cognition: the Realization of the Living”, Dordrecht: Reidel Publishing Co. 1980

(葛西俊治 かさいとしはる 札幌学院大学人文学部教授 臨床心理学科所属)